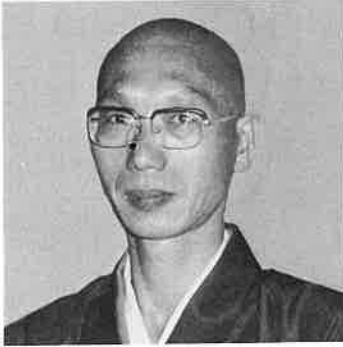


# 禪の国際化と

## 私の役割



河内 義宣

駒沢大学仏教学部 卒  
釣学院 副住職 補佐

今回、アメリカ禅センターへの留学を志したのは、そんなにだいそれた望みがあつてのことではない。ただ初心に還つて修行しなおさねば、という考えからである。

ほそぼそながら、師匠の留守をあづかり、毎週一度の坐禅会を続けてきているが、メンバーの中には、数は少ないながらも、真に坐禅を楽しみ、文字どおり道楽、道を解して自ら楽しむまでになっている人たちがいる。

『法華経』「五百弟子受記品」に

其の国の衆生は、常に二食を以てせん。一つには法喜食、一つには禅悦食なり。

とあり、また道元禅師は『弁道話』や『普勸坐禅儀』において、坐禅は「是れ安楽の法門なり」と示されているが、省みて自分は、坐禅を自己棄籠中の物にしていかどうか、思えば慚愧にたえない次第である。坐禅は仏行だからやらねばならぬ、といった「つとめ」

の気持はあっても、これを禅悦食とするところまでは至っていない。したがってまた安楽の法門として受取るには道なお遠しの憾みがある。これでは、人に坐禅を行ぜしめ、人を仏道に誘引して仏地見を開かせることは不可能事に属する。初心に還らねばと思うこと切である。

いま一つ、私を留学に馳りたてるものは、日本仏教、寺の今日的な姿の不甲斐なさである。二十年弱、寺をあづかり、多くの人びとと接して思うことは、今日の寺は、亡き人を介在してはじめて成り立っていること、極言すれば亡き人の介在なくしては存立し得ない状態にあることである。私はここに大きな矛盾と疑問を感じ、自分の無力さを思い知らされるのである。

今日、家族制度が急速に崩壊しつつあり、核家族化が進み、合掌することも知らない人たちが急増している実状を見る時、祖先をまつる心がそう簡単に消滅しないとは思ふものの、日本仏教の基盤が大きく崩れつつあることを感ぜざるを得ない。いまにして、生きて

いる人を相手にした仏教を打ち建てねばならぬと痛感するものである。

以上の二つの課題解決のため、私は是非ともアメリカ禅センターに留学したいと思ひ立つに至ったものである。

## 二

「釈尊に還れ」「祖師に還れ」とはよくいわれることである。まことにそのとおりだが、今日の状況のもとで、いかにしたらそれが可能であろう。

汝等比丘、我が滅後に於て、当に波羅提木叉を、尊重し、珍敬すべし。闇に明に遇い、貧人の宝を得るが如し。当に知るべし、此は即ち是れ汝等が大師なり。若し我れ世に住するとも、此に異なること無けん……とあり、戒律は実に仏の生命だと示しておられるのである。

現に南法上座部仏教においては、比丘は、二二七の戒律をまもっている。しかし、これは、自らのさとりを究極のねがいとす。社会生活とは明確に一線を画

した出家教団の比丘ならでは受持し得ないことであり、自他共にさとり道の道に進もうとする大乘仏教では、あまりにも煩瑣に過ぎることである。そこで道元禪師は受戒するが如きは、三世の諸仏の所証なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の仏果を証するなり（『修証義』第三章）

と釈尊の精神の健承しながらも、三涉、三聚淨戒、十重禁戒の十六条にすべての戒律を集約されたのである。

そして、さらに一方において、

諸仏如来ともに妙法を単傳して阿耨菩提を証するに、最上無為の妙術あり、これただ、仏にさづけて、よこしまなることなきは、すなはち自受用三昧に遊化するに、端坐參禪を正門とせり、と、また、大師釈尊、まさしく得道の妙術を正伝し、また三世の如来、ともに坐禪により得道せり……（『正法眼藏』「弁道話」）

と述べ、坐禪と戒法、禪戒一如の道理を示されている。

そして、

もし人一時なりというとも、三業に仏印を標し、三昧に端座するとき、遍法界みな仏印となり、尽虚空ことごとくさとりとなる（同前）

とあり私どもが、たとい一会一時たりとも三昧の境地に正身端座すれば、この身このまがさとりであり、仏であると証明しておられる。ここに、釋尊に還り、祖師に還る道があるのであり、私どもは參禪弁道に精進しなくてはならぬと痛感するものである。

### 三

“仏教東漸”といわれる。仏教がインドから中国に伝えられて、禪が興るまでは約六百年を要した。日本に仏教が伝来し、貴族仏教、学問仏教の域を脱皮して、真の庶民の宗教となった鎌倉時代まで、これまた約六百年の歳月が流れている。

しかるにいま、仏教が欧米に伝えられて百年少々しか経過していない。この短い歳月の間に、また思想、信条の異なる欧米人が果して仏教を禪を理解し得るで

あろうかと懸念する向きもある。しかし、情報化社会の今日の百年は、過去の六百年に比すべきであらうし、また、<sup>1)</sup>外国人が果して禅を理解するであらうか<sup>2)</sup>などということは、思ひ上がりも甚だしいことである。

諸仏は一大事因縁の為に世に出現す。直に衆生をして仏の知見に開示悟入せしめんがためなり。而して寂靜無偏の妙術あり、是れを坐禅といふ（『坐禅用心記』）

太陽は、資本主義社会にあつても、共産主義社会にあつても、ひとしく太陽であるように、衆生をして仏智見に開示悟入せしめんとする仏の慈悲にはかわりなく、寂靜無偏の妙術、坐禅の効用また洋の東西を問うものではない。そして初発心時便成正覚である。

東京多摩の神暝窟では、ドイツ人のラサル神父が、自らも長く参禅し、信者にも坐禅を勧めているという。坐禅は宗教やイデオロギーを相対するものではない。だから、欧米においても、宗教やイデオロギーのいかにかわりなく、多くの人びとが坐禅に親しみ、中

には剃髪出家して、本格的に参禅并道している人の数も相当数にのぼり、また、すでに師家分上の境地に達した人もあるという。アメリカカソスの禅センターを訪ねた人の話によると、多くの人びとが嬉々として参禅に精進していること、資格や履歴のための修行ではなく、まさに、純粹に不染汚の行を修し、立派な僧伽を形成しているとのことを聞き、私は中国における禅の勃興期を思うのである。

爛熟した日本の寺の禅ではなく、新鮮で、しかも燃えるような道念をもつて禅悦食としての坐禅に親しむ異国の人びと、しかも家族制度や檀家制度のしがらみを持たないこれらの人びとと共に学び、共に坐り、坐禅をして真に寂靜無漏の妙術として駆使する弄精魂の智をみがきたいものである。